

この新聞で、工事の進捗状況が工事点描として写真付きで報じられもした。また、この期間にハワイ大学にいた渡部潤一氏のエッセイが 4 回にわたって掲載されていることから、幅広い取材も行われていた事がわかる。下は、1991 年 7 月 15 日第 14 号である。「すばる」の製造請負契約の入札の頃である。

(これは国立天文台・大型光学赤外線望遠鏡推進室の内部情報誌です。取扱いは十分に注意して下さい。)

No. 14

国立天文台・光学赤外線天文学研究系		大型望遠鏡望遠鏡新聞		1991年 7月15日(編集発行責任: 中桐正夫)	
定例準備室連絡会報告 (7月15日 (月) 9:30~9:50)					配布先 小平 海部 成相 唐牛 佐藤 安藤 家 山下 T 林 野口 中桐 宮下 海田 鳥居 三上 大田 能丸 上野 田中 W 田中 M
出席者: 小平、海部、成相、唐牛、安藤、家、野口、宮下、沖田、上野、林、三上、中桐 1. 今日、7/15:10:00; 観測装置WSII「分光撮像」・「広視野撮像」がある。 2. 7/12; 入札の開札があり、予定価格と49~50万円の差で、三菱が落札した。今日7/15; 契約を取り交わす。 3. 7/15; 管理部がメーカーと一緒に文部省に説明に行く。準備室から小平、成相、唐牛、安藤、宮下が行く。 4. 7/16; 13:00; 三菱とト-A上部について、AFFLでの打合の検討を行う。大成との打合せは7/22。 5. 7/16; 14:00; Press Release; 講義室(小平、海部、中桐)、家氏から愛称公募のキワードは? →資料を配る。 唐牛氏から Press Release についてはハワイ大学にFAXで連絡をした。Press Release のようなことはお互いに事前に連絡することになっている。 6. 7/19; 9:30; 制御棟平面アラジ検討会、10:00; ハソソフト打合、14:00; ハソソフト対策者打合 7. 家氏から報告: ソフトウェアは先週見ていただいたようにフロッピーは出るようになったが、8m望遠鏡に使えるかは疑問がある。7月末から岡山でシミュレーションを行うが2~3日宮下氏の協力をお願いすることになっている。 8. 7/18; 技術検討会、外の人は岡本光学: 原理の検査について、東大先端研保立氏: 光ファイバケーブルについて、東工大川本氏: ソフトウェア 9. 安藤氏から航空技術研究所との協力でウィンドスクリーン風の風洞実験を考えているとの報告があった。航空技術研究所は水流実験の結果D-A形状が決まったこともあり、非常に協力的である。 10. 合宿は前号で知らせた白石荘が野辺山観測所から1時間以上かかるなど遠いので、海の口温泉の和泉館にし、サービスを良くしてくれる旨、海部、中桐から報告があった。今日までの申込は4人と少ないので、案内をした人には問い合わせる。 11. 上野氏から: 7/10に三菱LSI研究所にいき、PtSi: 1000×1000画素の検出器が完成したのを見てきた。エリは17mm×17mm、これから観測器に組み込む実験にはいる旨報告があった。					
メキシコ日食観測成功 (機部隊)					
香西氏の報告によると、メキシコ日食機部隊の観測は断崖があったが成功した。また香西氏の観測地は快晴であったとのことである。					
入札開札 (7月12日)			7月16日記者会見		
入札に関することは管理部の専管事項であるので、準備室としては管理部からの報告を聞くしかないが、安藤幹事からの報告によると、予定価格との差が49~50万円という価格で三菱電機(株)が落札した。まずは予定通り。			7月15日の三菱電機(株)との契約締結を受けて、大型光学赤外線望遠鏡計画を建設開始を発表する国立天文台の記者会見が7月16日に設定された。6大新聞、共同通信、時事通信、NHK、天文関係雑誌などに知らされている。		
三菱電機 (株) と 製造請負契約へ			同時に愛称公募		
7月12日の落札を受けて、7月15日に三菱電機と製造請負契約が結ばれることになる。三菱は鏡材にエッチング、鏡の研磨にコンタラス、総合的なコンタクトにエッチングを使うことになる。これからは堂々と三菱に会うことも、注文をつけることもできる。さあ、これからは良い望遠鏡建設に向けて頑張らねば!			今までと全く批判のあったJNL Tという呼び方にかわる大型光学赤外線望遠鏡の愛称を上記の記者会見で全国的に公募することになった。新聞がどの程度の記事に取り上げてくれるか心配ではあるが、天文関係の雑誌と合わせて宣伝してどのくらい応募があるのだろうか? 何万通もくるのではという心配もある。準備室の机がハガキの山になるのだろうか?		
			審査委員は次の9名 <small>に決定</small> <small>30名</small> 7月11日、準備室では古在台長、小平、海部、林(準備室から)、清水洋一(文部省学術審議会委員)、市川、芝井(JNL T委員会から)、神田(アチアとのコンタクトのある天文台職員)、楠田枝里子(科学ジャーナリスト)の9名を大型光学赤外線望遠鏡の愛称選考委員として選んだ。		
			準備室合宿		
			かねて計画中であった大型光学赤外線望遠鏡準備室合宿は 日時: 8月18日、19日(日、月) 場所: 長野県南佐久郡南牧村海の口 和泉館 宿泊料金: 1泊2食で ¥10,000 テーマ: 募集中ですが、準備室の名称も重要議題です。 大学院生の参加も希望しています。交通手段は車の相乗りでみんなで行きましょう!		

.....裏面に続く.....

下は、1992年11月12日第97号に掲載された渡部潤一のエッセイ（その1）である。

渡部潤一エッセイ集（その1）

<ハワイのライフスタイル>

ハワイにきて、こちらの人のペースに合わせてかなりライフスタイルが変わった。まず朝が早い。研究所の秘書の中には7時に仕事を始める人もいる。ブルーカラーはもっと早く、アパート近くの工事現場では6時頃から作業が始まったりする。さすがに研究者はばらばらだが、私もつられて出勤が三鷹より早くなった。また、帰るのも早い。一応4時半で仕事は終了である。研究者でも5時過ぎには半分ほどが帰宅する。もちろん、完全週休2日制なので土日はほとんど人がいない。ある小学校では試験的に週休3日制を導入して、評判が良かったので続けるというニュースを聞いた。

優雅である。

さらに、休日の過ごし方が変わった。基本的に土曜日には休んでいたのに、2日も休日が続くと、両日も家でごろごろしていることはなかった。さんさんと輝く真昼の太陽の魅力に誘われて、元来腰の重い僕でさえ外出することになる。バーベキューセットを買い込んで、友人たちとビーチバーベキューとしゃれこむ。冷えたビールと弁当を持ってハナウマ湾にシュノーケリングを楽しむ（実はビーチでの飲酒は違法なのだ）。文庫本を一冊もって、公園へ行き、子供を遊ばせながら木陰で読みふける。穴場の店を聞きつければ、ショッピングへ、新しいレストランがオープンすると、さっそく味見へ。

やっぱり優雅である。

この優雅さの原因は第一に気候の良さ、第二に人口密集度が適度なための都市空間の便利さと快適さ、第三に駐車場の豊富さだろう。ただ、ハワイで優雅になりきれない地域があるとなれば、それはワイキキかもしれない。

<バスケット日米対決>

手をあげながらゴール下に走り込む。と、タイミングよく鋭いパスが飛んできた。僕は、それを受け取ると間髪をおかずジャンプして、バスケットに放り込んだ。ゴール下からのシュートほど簡単なものはない。

「オー、ノー！」

ブライアンが悔しがらる。僕はエイイチを振り返り、声もなくにやりと笑う。一瞬、言葉に尽くせない仕度感と、連帯感とが僕たちを支配した。それは、久しぶりに決まった見事なプレーのためではなかった。

私の滞在している天文学研究所ではスポーツが盛んである。月曜と金曜にはサッカー、火曜と木曜にはバスケットボール、また、いつものフィールドが使えないときには研究所の前庭にネットを張ってバレーボールをする。僕も昔とった杵杵でもってバスケットボールに参加している。研究所には僕の他にひとり日本人の大学院生エイイチ、江上英一というのがいて、ほとんどの種目に参加するタフガイなのだが、これがめっぽう旨い。バスケットの旨さは研究所一といってもいい。普通、バスケットの選手は背が高いが動きは鈍い「うどの大木」型か、背は低くても小回りと瞬発力がある「こまねずみ」型に分かれる。僕は明らかに前者だが、エイイチはどちらもでないオールマイティである。

この日はたまたま集まったのがエイイチ、僕、ブライアン、ジェレミーの4人で、日本対アメリカの2対2の編成になった。バスケットの日米決戦である。こうなると、普段旨くない僕も不思議に燃えた。エイイチと僕の連携プレーも実によく決まった。カットイン、スクリーン、そして遠距離シュート。どれをとっても、現役の時にはなかなか旨くいなかったプレーである。

ところで、この本場アメリカでバスケットをやりはじめてから、気が付いたことがある。彼らは実によく感情を表に出すのである。嫌みなほど露骨である。悔しくても、嬉しくても、本気でそれを言葉にする。一方、エイイチも僕もほとんど無口である。本来ならホームランを打って帰還した野球選手のように手と手をうち鳴らして喜びを表すような見事な連携プレーであっても、目と目で喜び合うだけだ。アメリカ人が大声でくやしがついているのと実に対照的である。特に、この日米決戦になるとその差が顕著だ。性格ということもあるし、僕の場合、英語があまり旨くないという事実もあるので、そうならざるを得ない面もある。しかし、実はもっと根が深いのではないかという気がする。その根にあるのは、やはり国民性の違いではないだろうか。喜怒哀楽の感情を抑えるのが美徳とされ、知らず知らずのうちにそう教育されてきた日本人と、必要以上に感情を表に出すことさえ厭わないアメリカ人との違い。そういえば、一昔前、ある演奏家が日本人のお客の反応が余りに静かなので、自分の演奏が気に入られなかったのかといふかかったという話を何処かで読んだ覚えがある。

かくして、僕の中に日本人という「精神構造」が骨の髄まで染み込んでいることを改めて気づかされたのである。

と、こんな記事もある。この頃は、パソコンもあまり発達しておらず、殆どはワープロソフトの「一太郎」で書き、写真、図などは糊で貼り付けてコピーを取り、配布していた。

次号をお楽しみに！